池の坊
圖解 生花四季の活け方 下

特116
4

始

特116
4

池の坊
圖解

生花四季の活け方

池の坊四十三世家元 專啓宗匠題字
南浦仙舟 著

文進堂藏版

大正
15.12.4
內交

池の坊
圖解

生花四季の活け方下卷目次

秋季草木の條

錦木の生け方……一
秋海棠の生け方……四
葭の生け方……七
芒の生け方……一一
笹龍膽に付いて……一五
萩の生け方……一六
女郎花の生け方……二一
葛の生け方……二三
撫子の生け方……二六
鳥頭の生け方……二八
蔦の生け方……三〇
桔梗の生け方……三三
刈萱の生け方……三七
紫苑の生け方……三八
藁吾の生け方……四一
荻の生け方……四四
茶の花の生け方……四四
茶梅の生け方……四六
秋季の祝儀花……四九

冬季草木の條

落霜紅の生け方……五〇

目次

金盞花の生け方……五二
縦の生け方……五四
葉牡丹の生け方……五五
福壽草の生け方……五八
山橘の生け方……六〇
草珊瑚の生け方……六一
冬季の祝儀花……六四
附言……六五
祝儀に用ゐてならぬ花……六六
四花に付いて……六八
瓠瓜花器の使用方……七二
車僧花器の使用方……七四

終

池の坊
圖解

生花四季の活け方

下卷

南浦仙舟著

秋季草木の條

錦木の生け方

錦木は幹や枝に硬皮質の縦翼が密生してゐます、葉は秋に至つて紅葉するものです。さうしてこの木は山林に自生し、又庭園に栽培するものであります。

この木を生花に用ふる期間は葉の紅葉したる時及落葉の時に用ふるものです殊にこの木は秋氣分の最もよく溢れて居る雅致に富んだものであります。

この錦木は木の質が最も粘り氣の多いもので少々烈しく扱つても、折れる心

配の無いものです、故に初學者の稽古物としては最も適當な材料であります。

然し撓める場合に縦翼の落ち無いやうに注意すべき事であります。

この木は前述の如うに撓め易く又初心者の稽古用の材料として、可いものですが、挿して後に花形を直すために枝をひねりて、枝の向きを直す如うな事は出來無いものです、縦翼のために挿したる後は枝の自由に廻らぬものですから挿花の場合によく花形、各枝向に注意する事であります。

亦錦木は葉の紅葉の時は錦木のみ一種を挿す事、他の花物を根〆に用ふる事も差支ありませぬが、落葉後は必らず根〆を使用する事です、さうしてその根〆に使用する花の色は赤色を用ひ無いで、白色のものを用ふるものであります。

なほ注意せねばならぬ事はこの木の出生です、大抵の植物は蔓物又は垂れ物で無い限り各枝先は上向きに立ち上るのが普通ですが、錦木は全くそれ等の植物に反して枝先は横向になつて居るものです、故にその自然の出生を尊重して枝の岐れ工合や枝先の趣に留意して第一圖の如うに挿すべきものであります。錦木は祝儀賀席以外の席には差支ありませぬが、陰性の木であるため祝儀賀席

第一圖 錦木と白菊

には不適當の花であります、又花形は眞、行、草、何れに挿すも自由ですが、花器は成るべく綺羅びやかなものよりも古色めいた花器が相應しいものであります。

第一圖は錦木と根〆白菊の生花であります。

秋海棠の生け方

秋海棠は陰性の宿根草でその高さ二尺程に達し、葉は歪楕圓形のものを互生して、その葉は葉眞から一方は廣く、他の一方は狹く成つて居てそれが一本の莖で見ると何れも交互になつて居るのです、さうして葉腋に肉芽を生じてよく繁殖するものであります。

花は蘭又はぎばうしゆの花に似て淡紅の花を秋の初から末にかけて開くものであります。

秋海棠は前述の如く葉は大にして、非常に綺麗な葉である故に華道では葉物としと取扱ふのですから、その葉組にはよく秋海棠の個性を心得て、出生に逆ふ事の無いやう挿すのであります。

この草は多汁性の質で極めて莖の柔いため最も撓めの難しいものは、手荒く扱ふ時は折れ易いものです、殊に節から折れ易いものですから、よく注意をすべきものであります。

恁うして挿すのですが、この花は最も水揚に困難するものです、第一この花の特徴として鐵を嫌ふものです、故に金屬製の花器を使用する場合には妙に枯死するものです、從つて切り採る場合も爪などで切り取るべきです。又竹製の花器も水揚を妨げるものですから、土器又は木製の花器を使用すべきであります。さうして花形は眞、行、草の何れに挿すも差支はありませぬが、花が優し味のある植物ですから、花器もまた可憐なものを選ぶ事が最も必要であります

この花は陰性である故に決して祝儀賀席には用ひ無いものですが、其の他の席には差支ありませぬ、風情に富んだ花であります。

水揚は根元を炭火で燒いて、冷水に深く二時ばかり浸して置くか、又は莖の根元を十文字に割つて、山椒の實を碎いて挾んで置く等の方法であります。

第二圖　秋海棠（しゅかいだう）

第二圖は秋海棠の生花であります。

葭の生け方

葭は一名蘆とも稱します、川邊又は海邊に自生する宿根草木で、春舊根から發芽して秋に至つて莖上に大きな穗を拔きて、圓錐花序に多數の花をつけるものです、その高さは一丈餘に達する水草として大きい種類のものであります。

この葭の個性には特に特徴と言ふ程のものはありませぬが、秋の花の出る頃になると葉が全体に垂れ氣味になり、又折れ葉が出來て亂れを生じて淋しくなるものであります。

故にこの葭を生花とするには淋し味を主として葭の風情を表はす事に留意すべきです、さうして餘りに多く挿す事無く、又葭の花は觀賞するほど綺麗なものでありませぬから、必らず他の花のある水草を根締に用ふる事であります。

亦この葭は撓める場合に餘りひどく當る時は折れ易いものですから、扱き撓めを施し、葉は向きの惡しき場合は葉柄の部分を指先で摘みて廻す事でありま

す。

恁うして設計後に挿すのですが、葉が重り合つたり、丈並べをなして趣きを同じにする葉が出來てはなりませぬから、必らず全部の葉の趣きが異つて居らねばならぬのです、又根〆の花も餘りに綺麗に挿して葭の個性を忘却せしめる如うの事があつてはならぬから、よく其點にも留意すべきものであります。

葭は葉の卷き易いものですから、葉の卷いて居るものは葭全部を水に浸けて置くと葉が開きますから、葉が開いて後に、切り採りたるまゝでまた葉の卷いて居ないものは其儘で挿す丈の長さに切つて根元に脱脂綿を詰めて、稀鹽酸又は酒精に浸す方法であります。

葭は前述の如うに淋しいものですから、祝儀賀席には用ふる事の出來ないものですが其他一般の席には差支ないものであります。

第三圖は葭と杜若との生花ですが、第四圖は葭を男株に、杜若を女株に使用して魚道活けに挿したるものであります。

第三圖　葭と杜若

第四圖　薮と杜若

芒の生け方

芒は山野に自生して居るものですが、秋の七草の一つに加はつて居るものです。庭園などに栽培して賞觀されて居るものであります。

芒は其の高さ五尺餘にも達するもので、秋に至りて、莖頂に塵拂狀の穗を出すものであります。

この草は未だ穗の出ない中は芒と稱して、穗が出て、尾花と稱へられて居るものです、その風情は殊に秋の哀調と淋し味を持つもので秋と云へば直ちに尾花を聯想され、秋空に拔き出でたる穗先は夕風に靡く姿は恰も人を招くが如くです、この風情を思ひ浮べては、必らず明月を思ふのです、月を思つては、その葉末に綴る白露が明月の光に映じて千萬の眞珠を點じたる如き樣を聯想するのであります。

いかにこの「尾花」なる文字が昔より俗歌俗謠に詠はれ、歌題とされたる事の多きを知ることが出來るのです。この如うに尾花の幽趣は秋の淋し味を我等

に覺えさしむるものであります。

故にこの草を挿花とするにも、その個性である自然を心得てその風情を表はすやうに挿すべきが肝要であります。

前述の如くこの花は幽寂清楚を個性として居るものですから、何程多く叢生して居ても、少しも賑やか味の無いものであります。

然しこの草は葉物として取扱ひ又垂れ物としても取扱ふもので、從つてその設計の難かしいものであります。

芒は穂の出ぬ中は葉の着き方が密接してよい材料も多いですが、穂が出てからは葉の葉柄の着元から直角に開き、穂首も長く突き出で、甚だ恰好の惡い、とても挿花に用ふる事の出來ない如うなものが多く出來るのであります。

故に成るべく穂首の短い葉の立つたものを選ぶのです、撓め方は葭と同じ如うに扱き撓めを施し、葉も葭の如き方法を施して少々その向きを變へる事が出來ます。

葉は何れも長くて垂れ下つて居るものですが、決して下の葉などと縺れて葉交ひになつてはならぬのです、その場合は葉に鋏を入れることです、鋏を入れるには切口が必らず向ふ側に成るやうにして葉の形の通りに摘み込むのであります。

又切れ葉を幾個所作つても差支ありませぬから、縺れ葉の出來ないやうにするのです、又折れ葉も何枚あつてもよいのであります。

恁うして芒の設計が終れば根締の花物です、芒は必らず、根締に他の花物を用ふることですから、他の花物を使用しますが、餘りに華かなる赤色の如きものは芒の風情を傷つけますから、白色、黄色、紫色等を選ぶのです。さうしますと野菊又は笹、龍膽等のものは芒の風情を一層引立てるものであります。

くどいやうですが、芒は勿論のこと根締のものも餘りに多く挿す事なく、芒を二本用ふれば根締のものは三本、芒を三本用ふる時は根締のものを四本と云ふ如うに總數で奇數を用ふるのであります。

亦花器も餘りに美麗なるものとか、重々しいものは相應しくありませぬから小形の籠花器又は竹筒などを用ふれば相應しいものであります。

第五圖　芒（すすき）と笹龍膽（さうりんだう）

この花は水揚を必らず施すものです、さうでないと水を揚げ無いものです、その水揚法としては葭と同一の方法を施すことであります。

芒は祝儀賀席には一切用ふる事の出來ないものですが、其他の席には差支なく殊に月の夜などの生花としては最も相應しいものであります。

第五圖は芒二本と笹龍膽三本を挿したる生花であります。

笹龍膽に付いて

笹龍膽は籠膽とも稱して、山野に自生するものですが、觀賞用として庭園に栽培されて居るものであります。

この草は秋莖頂に紫碧色の筒狀を成して、尖端が五つに裂れた花を開くもので、其の高さは二尺位に達するものであります。

さうしてこの花の特徴としては別に取り分けて言ふ程のものでありませぬが只その個性としては全体が荒凉と淋し味を具へたるものであります。

故にその個性に從つて、餘りに賑かに挿すものでありませぬ、何處までもこ

の淋し味を主として挿すのであります。

この花を生花に用ひられて居るのは他の物の根締又は二重切の下口等に用ひて、一種活けは餘り見受け無いものですが、一種挿の出來無いものではありませぬ、今これを一種挿にせんとする場合は前述の如く、淋し味を主として、花器もまた重々しい、華やかなもので無く、小形の花瓶を用ふる事であります。

挿し方としては特に説明を要するほど設計に困難なものでありませぬから、生け方は略することにします、水揚も必要なものでありませぬが、たゞ逆水をかける丈け位で十分であります。

この花は祝儀賀席には一切用ひないものですが、其他の席には一般に用ひて差支のないものであります。

萩の生け方

萩は山野に自生して居るものですが、庭園にも栽培して、觀賞用とされて居るものであります。萩の莖は根より叢生して、枝は長く垂れて居るものです、葉は棗の葉又は南天の若葉に似てやはらかです、花は秋に至りて、淡紫色又は白色の小花を開くものであります。

この萩は山野に自生して居るものは枝葉が叢生して幾分立上つて居りますが庭園に栽培する糸萩は野生の萩の如くに枝葉は叢生せずして弱々しくて甚だしく垂れて居るものであります。

故にこれを生花にするには野生の萩はその趣きを表し、糸萩は糸萩らしくその趣きを表すやうに挿す事であります。

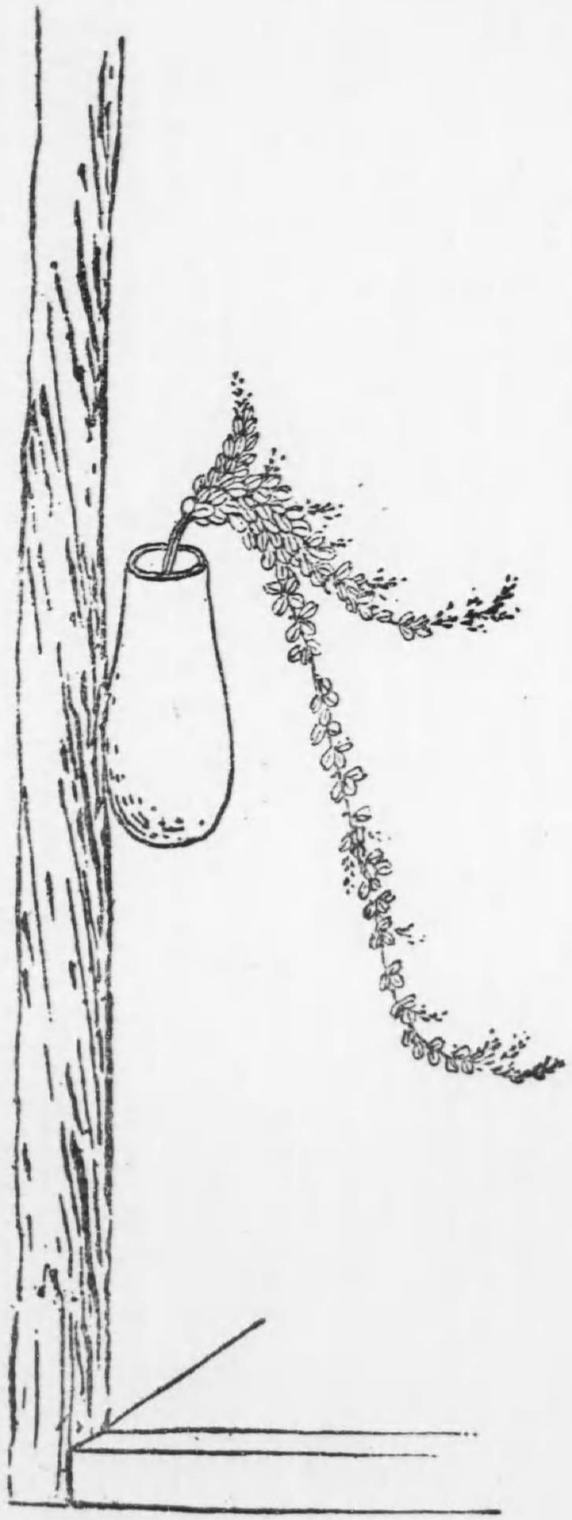
さうしてこの萩は尾花とともに秋の七草の中に加へられたる風情に富んだ花ですからその心得で挿すのであります。

前述の如うに萩は垂れ物ですから、其生花の花態も必らず草の形に挿さねばならぬのです、故に花器も向掛け、横掛け、釣花器等を用ふる事であります。

野萩（野生の萩）は他の種類の萩よりは小枝が多く、又葉も密接に出來て居りますから、餘り弱々しく挿す事なく、只萩の風情を失せさせないやうに、多くの枝を用ひず、成るべく葉の密接した枝を選んで、木數を少なく挿してその

第六圖　野萩（のはぎ）

第七圖　糸萩（いとはぎ）



風情を表はすのであります。

糸萩は野萩よりは枝の弱々しいもので、小枝も少なく、葉柄は長くして、葉もまばらで非常に可弱いものですから、其の花態も野萩ほどに充實させず、長く垂らして、木數も少なく挿すものであります。

水揚は秋草中でも最も困難なもので二尺以上の長いものはなかなか水の揚らない、ものです、切り採る時は早朝（未明）が最もよろしい、さうして切り採れば風の當たら無いやうに包んで持ち歸つて、生花に挿す丈に根先を切り捨てゝ根元を碎いて胡椒を十分にすり込んで逆水をかけて、挿すのです、恁うして花器の中へも胡椒を少し入れて置くと、可成に水を揚げるものであります。

この花は祝儀賀席には用ふる事は出來ませぬが、其の他の席には差支ありませぬ。

第六圖は月形の釣花活けに野萩を挿したる生花です、第七圖は糸萩を横掛に挿したるものであります。

女郎花の生け方

女郎花は山野に自生するもので、秋の七草の中に數へられたるものです、葉は菊の葉に似て、深く岐れて毛を生じたるものが對生して居ます、花は黄色のものを枝の梢に簇り生じるもので、莖は圓く、その高さは四尺程に達するものであります。

さてこの女郎花によく似たる花の白色のものがあります、これが男郎花又をとこめしと稱へられて居るものであります。

前述の如く女郎花は誠に優しい、初秋の淋し味を表はす花です、この花を挿すには普通一般の草木の花形よりは副を幾分高く挿して、眞、副の枝先には花を多く置くのです、体よりは副を勝たし、副より眞を勝たしめて挿すのです、即ち上勝ちの花にすることです。さうして各枝先の花が一かたまり宛はつきりと區別されて、それが下段ほど淋しくすることであります。

恁うして縺れの出來無いやうによく注意をして挿すのであります。

第八圖　女郎花（をみなへし）

それからこの花は必らず水切葉を置かなければならないのですが、体は女郎花を短かく切るために適當の葉が殘ら無い事があります、この場合は葉のみのものでも差支ありませぬから、用ひて水際に葉を用ふる事であります。

水揚は特に必要なほどのものではありませぬが、水が下つて萎れかゝつたものは鹽を入れた湯で根元を煮て冷水に深く浸す事か、薄荷油に浸す事であります。

女郎花は祝儀賀席には用ふる事の出來無いものですが、其他一般の席には用ひて差支のないものであります。

第八圖は女郎花の生花であります。

葛の生け方

葛は萩、女郎花等と共に秋の七草の中第一位に置かれてある、なかなかに其情緒のあるものであります。

葛は蔓性の宿根草で、山野に多く自生するものです、葛の根からは澱粉を採

取し、これを葛粉として、我々の食用に供し、又蔓の纖維からは布を製したりして、用途の多いものであります。

葛の個性としては前述の如く蔓性のものですから、葛其の物の力で立ち上る事の出來ないものです、故に必らず他のものに卷きついて繁茂するものであります。

從つて華道でも其物のみを生花に挿す事が出來ないために、雇と稱して牽牛花を挿す場合の如うに、他の植物の枯枝を使用して、それに卷きつけて挿すのであります。

生け方は萩の如うに草の花形に挿す事に限ります。さうしてこの葛の花は九月頃葉液から淡紫色の蝶形の花を三四寸の總狀につゞるものですが、餘り蔓先には花を置かぬやうにして、元の方に花を用ふるのです、蔓は總て右卷に卷きつけて生育して居るものであります。

故に生花も蔓先には花を置かぬやうにして、元の方に花を用ふるのです、蔓も雇へ右卷きに卷きつけるのであります。

第九圖　葛（くづ）

亦この花は萩の如く水揚の困難なもので、蔓の二尺五六寸以上のものは水揚を施しても水の揚ら無いものです、水揚方としては先づ挿すやうに設計して後根元を砕いて、薄荷油又はアルコールに十秒間程浸して置く事であります。

恁うして挿すのです。葛の花は艶麗である、姿勢に美しい點があると言ふ程のものでありませぬが、唯何物かに絶えず縋つて居て、やるせのない思ひを述べて居る如うな樣は、いかにも優しい情緒が表はれて、朝顔等よりも却つて風情のあるものであります。

この生花は祝儀賀席には用ふる事の出來ないものですが、他の席には差支ありませぬ。

第九圖は葛の生花であります。

撫子の生け方

撫子は石竹とも稱して、山野に多く自生し、又庭園にも栽培せられて居るものです、其の高さ二尺程にして、葉は深綠で竹の葉に似たる小さいものを對生して、その葉柄は節の部分を保護する樣に成つて居るのです、花は淡紅色で、花瓣の緣の淡く裂けた美しいものを枝先に開くのです、この花は夏から秋にかけて咲くものですが、秋に開花するものは秋の七草の中に加へられて深く愛でられるものです、又七草中では最も美しい花で、葉も共に撫子の名にそむかぬ慕はしい草であります。

この花は多く他の物の根締に使用されるものですが、一種挿も決して差支の無いものです、さてこの花は全体が細々として可憐なものですから、花器も大きなものは調和が取れませぬから、輕い器を好むで用ふるのであります。

前述の如く撫子は細々とした、莖の圓い竹の如うなもので、これに撓めを施す場合よく節から折れるものです、故除々に扱き撓めを施し、又節に力の入らぬやうにして、節と節との中間に力の込るやうにして撓めるのであります。

さうしてこの花は節毎に葉が對生して、その葉柄で、節を保護して居るものなれば葉は根元の節から委く對生して居るものですから、水際の節といへども葉の無い節を見せる事は出來ないのです。故に水際に成る部の節間の長いもの

を使つて、極木の上で花器の上面縁の下に成るやうに節を一つ使用つて、その節の葉は取り捨てゝ、その上の節の葉を水面の葉にして、それから上の節には全部葉を殘して、節のみのものを表はさないやうにするのです。

恁うして挿すのですが、設計中又は挿す場合に水面の葉を落すものですからよく注意をして挿すべきものであります。

各項に於いて説明して來た事ですから、最早知得せられたる事と思ひますが總べて華道では撫子の如き一かたまりと成つて花の咲く種類のものは、その花一かたまりを一輪の花と見等して、一かたまりの花が丈並べ又は十文字段々重ね等にならぬやうに挿すことであります。

水揚は施す必要なく、只切り採りたる儘で水の揚るものです、席も普通一般の席には差支の無いものであります。

鳥頭の生け方

鳥頭は一名『頭菊』とも稱します、ですが、菊の種類ではありません、この花は山野に自生し、また賞觀用として栽培されるものですが、その根は劇毒を有するもので、若し牛馬が、この根を喰つた時は即死するものです、このやうに劇しい有毒植物ですから、枝葉も毒汁をもつものです、莖は四五尺程に達し節毎に歪みを生じ、葉は互生して、刻みのある深綠のものです、花は秋に至りて、穗狀を成して、淡紫白色のものを開くものであります。

前述の如うに、この花は有毒植物である故に祝儀賀席は勿論客席にも生けられないものですが、挿してその風情のあるもので、只書齋又は連花等には差支無い事に成つて居りますが、これは華道の定めで、自己の居間とはいへ、家庭には最も好ましく無いものです、何故なれば、この花は如何にも烏帽子の形に似て、小兒の手にしたがるもので、實に危險ですから、家庭には絶對に挿さないがよろしいと思ひます。

この花の設計には、先づ何れの花も同じやうに眞、副、体其他の役枝を定め下の大葉は落すのですが、恁うすると体は花のみに成つて、葉が殘ら無くなるのです、この場合は根元の大葉で、体を作つて、上の花は切り落すのです、さ

うしてこの花は穂狀に成つて下から開くもので、花の多く開いた時は、莖は花の重量に堪へ兼ねて、垂れるものですから、少々穂先の垂れることは差支ありませぬが、餘りに垂れるのは見難いものですから、餘りに垂れ下つたものは花を間引き取るのです。

恁うして挿すのですが、この花は節毎に歪んで居るために水際が揃はぬためよく心して挿すべきであります。

水揚は特に必要といふほどのものではありませぬが、根元を炭火で燒いて、冷水に二三時間浸けて置けば水の揚るものであります。

蔦の生け方

蔦は葡萄の一種にして、山地に自生するものです、又人家にも栽培して、樹壁等に延ばして觀賞されるものであります。

この植物は蔓性のもので、他の喬木等に攀じ登つて生育するものです、葉は三尖にして、鋸齒を有し、光澤のあるものを互生して居ります。この葉は白汁を含有して居るもので、之れに觸れる時は漆瘡を起すことがあります。花は夏の頃葉腋から淡黃色の小花を簇り生じて、熟すれば黑くなるものであります。

さうして秋に至ると葉が紅葉するものです、餘分のやうですが、總べて植物の葉が紅葉する理由は、離層と稱する隔膜が生じるため水分が減少して緣の色素に自然變化を起すものです、この離層は葉柄と莖との間に多く出來て落葉するのですが、蔦は葉身と葉柄との間及葉柄と莖との間との二箇所に生じるものです、故に先づ最初に葉身のみ散つて、葉柄は莖に殘つて居るものですが、やがて葉柄も散るものであります。

さうしてこの蔦を觀賞するのは紅葉期で古歌にも蔦紅葉として詠まれたる程のものです。又生花にも紅葉の時に用ふるのであります。

前述の如く蔦は蔓性ではありますが、古いものは隨分幹の大きいものがありますから、大きいものはそのまゝで用ひてよいのですが、幹から生じる若い細いものは必らず他の木に攀ぢ登つて居るものですから、そのまゝ使用するのです、若しからまつた木が葉着きのものである場合は葉を取り去つて枯木に作つ

て用ふるのであります。

次にこれを生花に挿す場合は前述の如き出生のものですから、必らず幹に葉柄のみの殘りたるものを其まゝにして用ふることです。

花形は植物が蔓性のものですから、草の花態に限り決して眞、行の花形に挿すものではあもませぬ、席は植物が紅葉物で散り際のものですから、祝儀賀席には一切用ひられ無く、又高貴の席にも遠慮をせねばならぬ、家庭には觸れば漆瘡の恐れのあるやうな植物は挿さないことが安全であると思ひます。併し會合連花等には差支無く、至つて趣味のあるものであります。

水揚は紅葉物ですから、必らず施すべきものです、その方法は根元を打碎いて、アルコールに十秒間程り浸して後に挿すことであります。

恁うして挿すのですが、この蔦に挿し合せる花物は決して赤色の如きものは蔦が紅葉ですから、配合が可くありませぬ故白色の小花のものを用ふる事であります。

桔梗の生け方

桔梗は秋の七草の中に數へられたもので、その姿の整然としたるものは古歌にも詠まれたるほどのものであります。

當時七草と稱するものは尾花、萩、牽牛花、藤袴、女郎花、葛、撫子の草を稱して、生花に挿すことに華道では定められてありますが、昔は牽牛花を用ひないで、桔梗を使用して居たものです、故に七草の中に牽牛花を加へなくして桔梗を數へて居る書籍を見るのであります、只今私が述べました桔梗が七草の一つに數へられたと言ふ事は當時我池坊に用ひられて居る意味で無く、昔に秋の七草の一つとして賞觀されて居た事を述べたのですから、誤解の無いやうに知得せられたいのであります。

桔梗は莖が圓くして、高さは三四尺に達し、葉は楕圓形を成し、鋸齒を有したるものが互生又は對生して居ります。花は紫色と白色の二種あつて、何れも筒瓣で、五尖の單瓣のものです、其の蕾は殊に面白い形を有して、古人の俳句

第十圖　桔梗（ききやう）

に、『桔梗の花咲くときぽんと音がする』とある程に、如何にも膨らんで、はち切れさうに成つて居るものであります。

桔梗の花は白、紫いづれもしほらしい花で、その挿し方も一種又は他の物の根締にも使用される事が出來ます。さうして花形も眞、行、草何れの形にでも出來ますが、元來が直立して、整然たる姿を備へて居るものですから、餘りに多くの數を挿すことは、その風情に傷付けるものです、撓め方は莖の脆いものですから、急に撓めることは出來ませぬ、菊の如うに徐々に撓めるやうにするものであります。

それからこの草物は葉が込合つて居るものですから、撓める場合に葉を損じたり、落したりして、挿上げて莖の餘りに見えるのは、その個性を失することになりますから、よく注意をして葉の損じ無いやうにすることです、さうして花は奇數を用ふる事であります。

水揚は菊の如うに根元を燒くか又は熟湯に根元を浸すことです、これ等の方法は既に述べた事ですから、説明は省きます。

席は祝儀賀席以外一般の席上に用ひて差支ありませぬ、

第十圖は桔梗の生花であります。

刈萱の生け方

昔、刈萱は秋の七草の中の葛を除いて、刈萱を加へられて居たもので、芒に似て、葉は芒より細くして、誠にしほらしい風情を備へて居るものであります

刈萱の個性としては特に述べるほどのもので無く、前述の芒に極似のもので葉が細くして垂れて居るものですから、從つて葉が、絡つて縺れたる、面白くない花形が出來るものです、故に此の邊の事は芒の如うに、絡つたり、縺れたりせぬやうに、又葉數を餘りに多く用ひて、賑か過ぎては、刈萱の個性である淋し味を無くするものですから、此の邊にも留意して挿すべき事であります。

さうしてこの草物と挿し合せる花物は白色か黄色のものを挿し合せる事で、赤色などのものは刈萱の自然を失はせしむるもので、可ろしく無いものであります。

第十一圖 刈萱（かるかや）と菊（きく）

花形は眞、行、草の何れに挿すも隨意であります。

水揚は葭と同じ如うに根元を碎いて、アルコール又は稀鹽酸に五六秒間浸す事であります。

席は祝儀賀席には一切用ふる事は出來ませぬが、其他一般の席には差支の無いもので、その風趣はなか〳〵に秋の淋し味を感ぜされるものであります。

第十一圖は刈萱に菊を挿し合せたるものであります。

紫苑の生け方

昔は秋の七草の中の牽牛花を除いて、桔梗を加へられて居たと言ふ事は既に述べた事です、その桔梗を去つて、紫苑を七草の中に數へて觀賞せられた人もあつたほどに、この花は風情のあるものであります。

紫苑は古名を『ノシ』又は『シヲニ』と稱したものです、この草の莖は高さ七八尺に達し、葉は互生して緣に鋸齒を有し、下葉は大きくして、上になるに從つて小さい葉であります。花は梢に枝を分ちて、單聚の形『よめな』の花に

第十二圖紫苑（しをん）

似て、淡紫色に青味のある小花を傘の狀を成して開くものであります。

紫苑は春夏の卷で解説しました銀寶珠の生け方と異なるところはありませぬから、詳しき事は銀寶珠の條を參照せられたいのであります。紫苑は銀寶珠と同じ如うに葉の使ひ方のむつかしいものですから、葉の使ひ方に能く留意してそれぞれの趣を持たせて挿すことです。又餘りに葉の形の見苦いものは、葉の縱に中央に通つて居る葉脈を輕く指頭で扱いて、その形を直す事ですが、紫苑は總て莖も葉も撓め難くいものですから、先づそれぞれの役枝に適當なる葉を選ぶ事であります。

花も銀寶珠と同じ如うに二本の外は用ひない事に定められ、花莖は葉を高くつき抜けて挿すものであります。

第十二圖は花莖二本と葉七枚を用ひて挿したるもので、葉のみで眞、副、体の役は成つて、花莖のみ高く抜き出て居るのであります。水揚は火氣で葉の萎れ無いやうにして、根元を炭火で、炭に成るまで燒いて、逆水をかけて、冷水に二時間程浸して置く事です、又は薄荷油かテレビン油へ四五秒間浸す事であります。

席は祝儀賀席の外は一般の席に用ひて差支の無い生花であります。

豪吾の生け方

豪吾は高さ三尺程に達し、莖、葉共に蕗に似て、莖の色は灰紫にして、葉は厚く、柔らかく、深綠色の光りのある大葉であります、花は形『をぐるま』の花に似たもので、單瓣の黃花を開くものであります。

豪吾は葉物の一種として取扱はれ、既に説明の銀寶珠、紫苑等の挿し方をするものです、それにこの草は花よりも葉を主に賞觀されて居るものです、普通この草の葉は前述の如く淡綠色で光りのあるものですが、中には黃又は淡紅若しくは白の斑入等のものがありますが、生花には多く深綠色のものを用ひられて居ります。

豪吾は莖、葉共に軟かいもので、撓めの頗る困難なものです、故に自然にそれぞれの役枝に相應しいものを選んで用ふる事です。ですが、強て撓めねばな

第十三圖　藁吾（つばぶき）

らぬ場合は扱き撓めを徐々に施すのです、さうすると少々は撓め得る事の出來るものであります。

さうして、この草は甚だ萎れやすいもので、挿す場合にぐず〳〵と手間取る時は花や葉が萎れてしまふものですから、設計の場合最も大葉は副、体又は眞の後になるもの等に選び、その他は適宜に大小の葉を選んで、あしらい枝に當て、手早く挿すものであります。

又藁吾は銀寶珠、紫苑等の如く花莖は二本の外は挿さ無いもので、その花莖も銀寶珠、紫苑等と同じく、眞に用ひて、葉を扱き出でゝ、高く挿すものであります。他の詳しき事は銀寶珠、紫苑の條を參照せられたいのであります。

水揚は必らず施さなければならぬものです、その方法としては、切口を碎いて十分間程、煮沸するか、稀鹽酸に五秒間程も浸す事であります。

席は祝儀賀席を除く外一般の席には差支のないものであります。

第十三圖は花莖二本と葉七枚を用ひて挿したる藁吾の生花であります。

荻の生け方

荻は水邊に自生するもので、葉、花共に茅に似て、莖は芦に似て、節間の短いものです、花は初め淡紫色で、後に至りて、白色と成るものであります。

荻は葭、芒などと、ほゞ相等しい個性を有するもので、その形も酷似のものであります。故に華道でもそれ等（葭、芒）のものと同じ扱ひにせられて居るものですから、既に解説の葭又は芒の條を參照せられて、適宜に挿されたいのであります。

水揚方法も芒、葭に同じです、然しこの荻は夏期にもよく生けられて居りますが、季節は秋季のものです、夏期には勿論若葉を用ふべきです、秋はその自然に從つて、枯葉を適宜に交へて挿すものです、恁うする時はその風趣の一層表はれるものであります。

茶の花の生け方

茶は茗とも書き、古く支那より種を移入して植えたるもので、只今は諸州に作られるものです。樹の高さ四五尺に達し、茶梅に似て、花は白色に黄を帶びたるもので、秋の末に開くものです、實は圓くして褐色と成るものです、葉は深緑にして光りあるものです、この葉を摘み採つて、葉茶、碾茶等に製して、吾等の日々の飲料に供せられて居るのであります。

茶は前述の如く茶梅に酷似のもので、椿の種に屬するものですが、個性が異つて居るものです。茶は枝葉が、極く根元から叢生して、枝葉は至つて根際に密生して居るものであります。

其邊が茶梅と異なる個性を有して居るものですから、生け方も其個性に從つて、他のものよりは水際の体を五分位下げて挿すのです、さうすると、普通の生花の花形よりは眞、副の割合に体が低くなります、又前述の如くこの木は根際に多く枝が岐れ出て居るものですから、体の岐れは勿論低くして副の岐れも低く挿して下方を茂らせ、上方は長く伸んだものとか、新芽を以つて恰好を備へるのであります。

恁うして挿す時は、自然の出生である、下枝が茂つて、上枝は割合に淋しくその個性を表はすことが出來るのであります。

さうして花形は眞、行、草の何れに挿すも差支はありませぬが、他の花物を根締に用ふる塲合は、茶が灌木である故に必らず草花を用ふることであります

この木に付いて特に注意すべきは、茶を生花に用ふる時は花のある期間丈けで、花の無い時は決して挿さ無いものです。故に卷頭の目次にも『茶の花の生け方』として、殊更に『花』の字を加へたのであります。

席は茶席外一般の席に用ひて差支ありませぬ、花は陰性のものですが、茶の實は結んでから、翌年に至つて蕾が付くまで落ちずに居るため、後繼をよくするものとして正月の『ゆづり葉』と同一の意味で、祝儀賀席に用ひて可いものであります。

茶梅の生け方

茶梅は山茶花と書いて『さゝんくわ』とも稱して、椿の類で又喬木です、樹葉、花は椿と同じにして少し小さいものです。椿はいかにも充實して居りますが、茶梅は幹が古木で、何れほど椿と酷似であると言つても、その間直な枝のあるもので、茶梅そのものゝ個性を有して居るものであります。

又この木は枝葉が茶によく似たもので、實も茶と同じやうに、翌秋の蕾を見て裂開するものであります。ですが、茶とは全然木の質が異なつて居るものです、茶は灌木ですが、茶梅は喬木です、只一見したところ枝葉が同じやうに見えるものですが椿、茶梅、茶何れも各々異なる個性を有するものであります。茶梅の花は白、淡紅、濃紅、絞り等あつて、觀賞用として庭園に栽培せられて居るものであります。

前述の如く椿、茶、茶梅は枝葉花が酷似のもので、その個性を生け表はさうとするには甚だ難かしいもので、茶梅を挿して、椿に成つたり、茶に見ゑたりするものであります。

故に椿は上卷で説明しました如く、喬木であつて充實したる狀がその個性であつて、茶は灌木でその狀態は『籠り枝』と稱して、下枝が繁茂して、水際を

低く挿したるが、その個性の表はれたるものであると知得して、茶梅は茶と異なつて喬木で、自然の出生は上枝が茂つて、下枝は上から押へられて、蔭枝の如く輕く生じて居ることを心得て、水際は茶の花に反して並通のものよりは三分位も高く挿すことです、又幹はいかに椿の如うに曲のある古木にもせよ、その間必らず眞直な點のあるものです、その點で椿と茶梅との異なる個性を見表はすことが出來るのですから、其點の素直なところに能く留意して、自然に從つて、其個性を表はす如うに挿すのであります。

亦花形は眞、行、草の何れに挿しても可し、他の花物を根締に用ひても、他の物の根締に用ふことも差支無く、任意であります。

水揚は特に施す必要は無く、席は一般の席に用ひて差支ありませぬが、只祝儀の席に用ふる生花には枯木を使用無い事であります。

特に生け上げ圖を示しませぬが、椿、茶の花の條を參照せられて、椿、茶などに見ない如うに茶梅の風趣が表はれる如うに挿されたいのであります。

秋季の祝儀花

秋季祝儀の席に用ふる事の出來る花は前編『池の坊生花のをしへ』で生け方解説のもの菊、柳、牡丹、萬年青、梅、水仙、南天等です、その他上卷で説明のもの長春及びこの書で解説のもの茶の花、茶梅等の花であります。

冬季草木の條

落霜紅の生け方

落霜紅は山野に自生し、又庭園にも觀賞用として栽培せられるものです、その高さ丈餘に達し、枝は細くして、葉は梅の葉に似て、光なく枝の間に集りて夏生するものです、花は六月頃五瓣の淡紅色の小花を開いて、實は冬に至つて熟して紅に成るものであります。中には黄、白のものもありますが、生花には多く紅色のものを用ひられて居ります。

落霜紅は落葉して、實が熟して紅色と成つた時生花に用ふるのです、この木は曲の多いもので、撓めも困難なもので、折れ易いものですから、撓める場合は充分に注意を拂つて施すことです、又幹の大きいものは叮嚀に切り撓めを施すのでありもす。

恁うして一通の設計が出來れば挿すのですが、この木は他の草木とは異なつ

第十四圖　落霜紅（うめもどき）

て、梅の如うに小枝が多いので、小枝と小枝との縺れが出來るものです、これ等の縺れ箇所の止むを得ない、餘りに目立たない所は其儘で差支ありませぬが大枝の縺れは全然許されないのですから、心得て挿すべきであります。

さうしてこの木には必らず他の花物を根締に使用するのです、その花の色は落霜紅の實が紅色ですから、白、又黄のものが相應しいものです、故に白椿、白の小菊又は白水仙等は可い色の配合のものです、又花形は長、行、草の何れに挿しても可いものであります。

水揚は特に施す必要は無く、席は一般の席に用ひて可いものであります。

第十四圖は落霜紅に白の小菊を根締に挿したるものであります。

金盞花の生け方

金盞花は冬季から春季にかけて花のあるものです、冬季は寒季のため花首が短くして、葉に埋つて開花して居ます、春季は冬季よりは花首も伸びて少々恰好を可くするものですが、風情は冬季のものにその趣があるものであります。

さうして金盞花の高さは七八寸位で、小枝の非常に繁茂するものです、葉は莖に付いて居るものは大きくして、枝の葉は小さく又小枝は莖について居る葉の内部に生じて、この枝の生じたる箇所にある莖の葉は他の莖の葉よりは比較的大きいものであります。

金盞花の花は菊の花に似たものですが、菊花よりは小花にして、正しく開花せず、盞子形に開くものです、色は紅黄であります。

この花は嚴寒を越へて春に至るもので、他の草花類の少ない時期の花で、挿花物の根締に多く用ひられて、非常に重寶がられて居る花であります。

然しこの花は前述の如うに丈の短い花ですから一種生けには餘りに用ひられないもので、他の物の根締又は二重切の下口に「冬籠り」などに挿されたるものは趣のあるものであります。

生け込みの際に莖について居る大葉を折つたり、切り過ぎたりして、小葉のみを殘して貧弱になるものですから、これを能く注意して大葉を落さ無いやうに、又邪魔になる箇所は挿し上げて後に摘み取つて、成るべく多くの葉を殘し

て、重々しく挿すのであります。

亦前述の如うにこの花は冬季は力が籠つて居るもので、春季は幾分伸び〳〵して居るものですから、その趣を表はす如う心懸けて挿す事であります。

水揚は施す必要は無く、只根元を打碎く丈で充分です、席は祝儀、茶席の外は一般に用ひて差支のないものであります。

樅の生け方

樅は常緑の大喬木で、生花には四季を通じて挿すものです、この木は多く山地に自生するものですが、庭園にも栽培されます、樹は幹も葉も栂に似たものです、實は松毬に似て細長いものです。この木は櫃の類を作る材に用ひられます。

樅は枝の出方が同じ箇所から周圍に出て、その枝の下枝は日蔭となるので弱く垂れ下つて居るものですが、上枝は元氣よく伸び〳〵と出て居るものであります。

さうして周圍の枝でも眞直に突き出たもので松の如うに腕曲に成つて居ないものです、故に其設計も樅の個性に從つて行ひ、又この樹は同じ箇所から周圍に枝の出るものなれば眞に用ふる役枝は何うにかすると、一方にのみ枝を出して一方を淋しくするものです、その場合は他の枝を用ひて、其箇所を補ひ、又副の岐れも、眞直に斜に出すものです、恁うして、樅その物の個性を生け表はすのであります。

亦この樹は美しい花の咲くものでありませぬから、花の無いものとして扱つて、必らず他の花物を根締に用ふる事であります。

花形は眞、行、草何れも隨意ですが、草の花態には能く〳〵注意を拂つてその根締等も考へて用ゐないと、根締のために雄大味のある喬木の趣も失する事になるのであります。

葉牡丹の生け方

葉牡丹は甘藍とも書き又『ボタンナ』『インゲンナ』とも稱するもので、その

第十五圖　梅と葉牡丹

高さ長きは二尺餘に達し、葉はあぶらなの葉より大きくして、頂に多く重りて生じ、皆抱き合つて恰度牡丹の花の如うです、其の色は冬季、春季の頃は紫色又紅紫色でまことに美しいものです、花は春季の末から夏季へかけて、蕾を出して、あぶらなの花より大きい淡黄色のものを開きます、さうして又冬季を經ても枯れないものであります。

葉牡丹を生花に用ふのは花の無い期間で、冬季から初春にかけて多く用ひられるものですが、四季ともに挿して可いことになつて居ります。

生け方は根締に水仙又は小菊等を用ひて挿すことも可いのですが、多く梅の根締又は椿の根締に挿して祝儀花に用ひられるものであります。殊に多く用ひられるのは梅の根締に挿して正月の花に用ふるのであります。

挿し方は餘りに困難なものでありませぬが八九月頃は動もすると水揚のわるいもので、萎れる事があります。其場合には葉に火氣のあたらないやうにして根元を炭火で燒いて冷水に二時程浸して置くことです。さうしてこの草を眞、副の役枝に使用する場合は撓めの甚だ困難なものですから、役枝に適當なもの

を選ぶことであります。

花形は眞、行の花態が相應しくして、花器は寸筒ものは不釣合ですから、薄端類又は水盤を撰ぶ事であります。

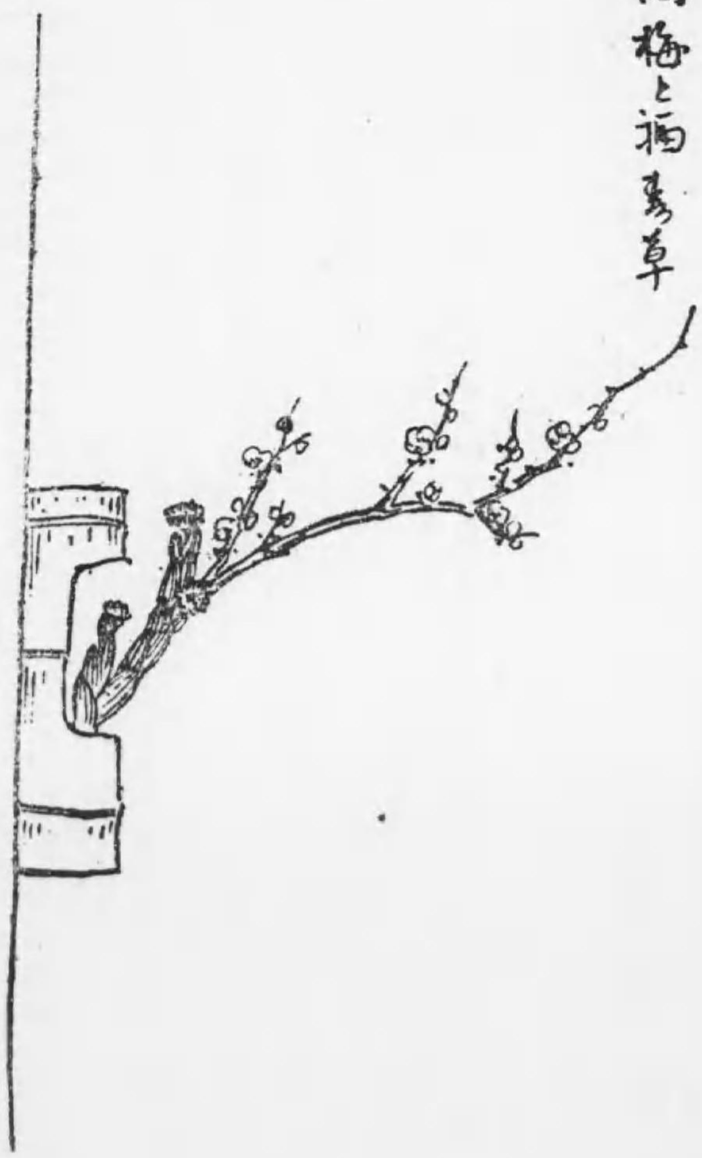
第十五圖は梅の根締に葉牡丹を挿した生花であります。

福壽草の生け方

福壽草は側金盞花とも書き、また元日草とも稱するものです、この草は水仙の如うに嚴寒を犯して舊根より生ずるもので、莖は肥えて、高さ二三寸にして葉は胡蘿蔔に似て小さく、花は黄色の半開の菊花の如うなものであります。（中には白色を帶びたるもの又紅色のものもあります。）この花は多く鉢植として歳首に用ふるものであります。故に元日草と言ふ名が付けられたものではなからうかと思ひます。

さてこの花は眞や行の花形の生花には全然挿すことの出來ないものですから草の花形にして、横掛け、向掛けに挿し、又は二重の下口、瓠瓜等の花器に冬

第十六圖 梅と福壽草



籠の態に挿すことであります。（生花以外の投入花とか盛花の場合はこの限りではありませぬ）

さうしてこの花は元來が小草ですから、數多く挿すと見苦しいもので、二本か三本を用ふることに限ります。生け方は困難なものでありませぬが、丈の短いもので撓めを施すことが出來ないものです、それから能く見受ける事ですが葉の萠え出でたるものを用ひて居りますが、これは餘りに好ましくないものです、薄皮の被を被ぶつたもので、蕾の大きい開かうとして居るやうなものを撰んで梅、山橘又は草珊瑚等のものを挿し合すれば相應しいものであります。

水揚は施す必要はありませぬ。席は前述の如く祝儀の席に用ふるものであります。第十六圖は梅と福壽草を横掛けに挿したるものであります。

山橘の生け方

山橘はヤブカウジとも稱し、又フカミグサとも稱へます。高さ四五寸にして葉は厚い鋸齒を有したるものを互生します。花は五六月頃淡紅色の小花を垂れ下つて開花して、實は晩春に至つて南天の如き紅色の實を垂下します。さうしてこの木は常綠木です、多く觀賞用として庭園に栽培されるものであります。

この木は福壽草の如く正月三ケ日間の生花の中に加へられたる祝儀花です、ですが南天の如く實物として取扱ふ木ですから、山橘のみ一種挿すことは出來ないのです、又丈の短いものである故に眞や行の花形にも挿すことが出來ませぬから、横掛、向掛け等の草の花態に挿すのであります。

この花は前述の如く實物ですから、何か他の花物を用ふることは殊更に述べるまでもありませぬが、生け合せるものは向掛なれば水仙、福壽草などが相應しく、横掛なれば福壽草を挿し合せることであります。

氷揚は特に施す必要はありませぬ、切り採りたるまゝ挿して充分に水を揚げるものであります。

草珊瑚の生け方

草珊瑚は『千兩』とも書きます、この花は山地に自生するものですが、觀賞

用として、庭園に栽培されて居るものであります。

草珊瑚は一株より叢生して、莖の高さは二三尺に達し、青くして泡節があつて、葉は對生して橘の葉に似て居ります、花は夏季に白色の小花を開き、實は熟して紅色に成つて南天の實の如うた成るのです、又珊瑚珠にも似たものであります。

草珊瑚は實が紅色のものと、黃色のものとの二種あつて、紅色のものを赤草珊瑚と云ひ、黃色のものを黃草珊瑚と稱して何れも其風趣は高雅なものであります。

生花には實の熟したる期間を用ふるのです、この千兩は實物として華道で取扱ふのですが、實物中この草珊瑚に限つて他の花物を根締に使用するもので無いのです、稀には殘花期には他のものと挿合せる事がありますが、盛りには必らず一種生けに挿すのであります。

この草は撓める場合節の箇所から、折れ易いものですが、節と節の中間で撓めるやうにすれば、平易撓め得られるものです、花形は眞、行、草何れにも挿

第十七圖 草珊瑚（せんりよう）

すことが出來るものであります。掛花、投入花等に挿しても氣品の高い花であります。

さうしてこの花は年を越へても落果せぬ、個性を有して居るもので、相續と云ふ意味から、萬年青、水仙等と共に祝儀賀席に用ひられ、又正月三ケ日の生花の中にも數へられて、用ひられて居る芽出度花であります。

水揚は特に施さなくとも水の揚るものですが、花器は餘りに重々しいものは不釣合ですから、餘りに大きい器は避けることであります。

第十七圖は草珊瑚の生花であります。

冬季の説備花

冬季祝儀の席に用ふる事の出來る花は前編『池の坊生花のをしへ』で生け方解説のもの菊、柳、梅、萬年青、椿、水仙、松、竹、桃等です、其他上卷で説明のもの長春及びこの書で解説のもの葉牡丹、福壽草、山橘、草珊瑚等の花であります。

附言

當時華道家一般に愛用されて居る挿花の大略を春夏秋冬の四季に區別を付けて生け方の説明をしましたが、春季の期節の中に加へました草木を晩冬、初夏夏季の期節の中のものを晩春、初秋、秋季の期節のものを晩夏、初冬、冬季のものを晩秋、初春にも用ふるものがあります。

又松の如き常盤木は四季を通じて用ひ、杜若は四季ともに生けますが、これ等は皆其の草木の最も盛なる季節で、最も多く生花に挿される事によつて區別したものですから、私の定めましたこの季節以外には決して挿してはならぬと言ふのでは無く、只この季節に用ふる時は草木そのものの個性又は自然に反することなく、又華道の矩規に逆らふことが無いのであります。

亦解説中生け上げ圖を圖示してゐないものがあります、これは前説によつて挿し方をよく知得せられたるものと思つて圖を省いたのですから、前編を熟讀あらん事を望んでをきます。

祝儀に用ゐてならぬ花

祝儀に用ゐてならぬ花は死花、殘花及毒を有する草木、形態の面白くないもの、又は名の惡いものを嫌つて用ゐないのです、今その大略を述べると。

木瓜（上卷春季草木の條參照）
木蘭（同）
藤（同）
棣棠花（同）
卯の花（同）
杏（同）
櫻（同）
海棠（同）
麻葉繡毬（同）
紫荆（同）

茱萸（上卷春季草木の條參照）
薊（同）
石蕗（蹴鞠）（同）
鳶尾（同）
紫陽花（上卷夏季草木の條參照）
銀寶珠（同）
おらんだかいたう（同）
河骨（同）
虎の尾（同）
柘榴（同）
剪夏羅（同）
木芙蓉（同）
山梔子（同）
葭（下卷秋季草木の條參照）

芒（下巻秋季草木の條參照）
笹龍膽（　同　）
女郎花（　同　）
烏頭（　同　）
刈萱（　同　）
藁吾（　同　）
金盞花（下巻冬季草木の條參照）
連翹（前編「池坊生花のをしへ」參照）

等の草木で、これ等のものは主として祝儀用忌む花です、其他多くの草木がありますが、何れも生け方解説と共に述べたことですから、前説を對照せられて心得てをかれたいのであります。

四花に付いて

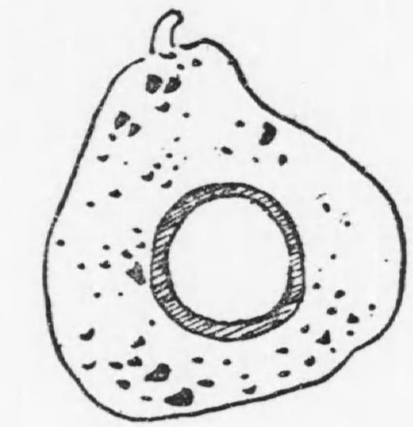
四花とは珍花、殘花、死花、復花を四花と稱するのであります。

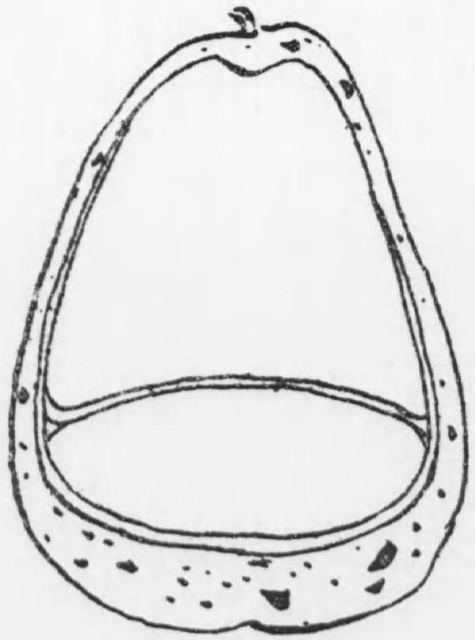
さうして、珍花とは例へば五月頃に咲くべき花が半月程早く四月頃に咲くものを珍花と稱して珍重するものです、ですが春季の暖い時季に咲くべきものが何かの關係で冬季に咲くものは珍花とは言はず、又生花に用ひないものであります、然し當時は暖氣の頃の花でも室で寒氣に咲せて居りますが、これ等は稽古用材料として使用しても、連花、客席には用ふべきものではありませぬ。

復花とは春季に一度咲いたものが秋季に至つて、再度咲くものを稱して復花と言ふのです、これは一陽來復と稱して春季と餘りに差のない秋季の温氣に植物が時期を違へて咲くものですから、華道では生花に用ひないことに成つて居ります。

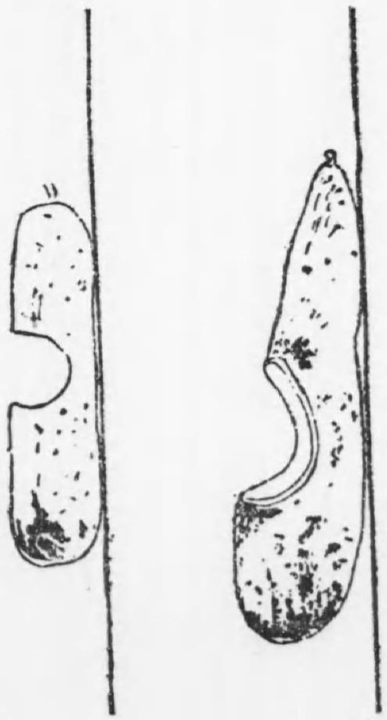
死花とは正當に咲くへき時期に咲かずして、一季後れて咲くものを死花と稱します、枯れたる花を死花とは言ひませぬ、枯れたるものは枯れ花と稱へるのであります。故に水仙、寒菊の如き冬季のものを春季に挿したりすることは、これを『死花を生けて居る』と言つて人のわらわれ者になるのであります。ですから幾等芽出度ものであると言つても、死花を祝儀の席に挿したり、連花、

第十八圖　瓢瓜（ふくべ）





第十九圖　瓢瓜（ふくべ）（掛生け）



客席に用ふる事は出來ないものであります。然し稽古用とする事は差支のない事は元よりであります。

殘花とは正當に咲くべき月より一ヶ月又は二ヶ月後れて咲く花、即ち前月又は前々月から開きつゝある花の殘り咲きを殘花と稱して用ふるのであります。

故に附言（前項）の項に述べました、春季の中のものを晩冬、初夏、夏季のものを晩春、初秋、秋季のものを晩夏、初冬、冬季のものを晩秋、初春に挿されるものは死花で無く復花でも無い事をよく知得せられて、其の季節を違へぬ生花を挿されたいのであります。

瓠瓜花器の使用方

瓠瓜花器は瓠瓜を乾して中を空にして、切口を好みの形に明けて花器に用ふるのです、瓢瓜と稱する植物は夕顔の一種で、實の形は圓くして、平たいものですが、中には細長い形のものもあります、又この肉は『かんぺう』にします。中をくり抜いて、花器にする丈でなく、多く炭取、煙草入等にも作られるのであります。

瓠瓜花器に挿す花は何も閑靜なものでないとならぬのです、瓠瓜の細長いものは掛花生けに用ひ、平たいものは置生けに用ふるのです、この置生けのものは大きいのは直徑一尺位のものがあります。置生けの瓠瓜には金盞花、福壽草の如き花を各籠の体に挿したるものは、甚だ閑靜なものであります。

さうして、この瓠瓜花器は平たいものは主として冬季に用ひられ、細長い掛生けのものは四季を通じて用ひられるものであります。

第十八圖は置生けの瓠瓜花器で、第十九圖は掛生けの瓠瓜花器であります。

車僧花器の使用方

車僧と稱する花器は、謠曲の外の六の五に車僧と言ふ謠があります。この謠に因んで、造られたる花器です。花器は竹筒で、第二十圖の如く、竹の太さより少し狹い圓い窓をあけて、上部の節も、下部の節も止めて、打抜かず其儘にして、圓い窓へ花を挿すのです。その挿し方は必らず花一輪は窓内に入れて挿

第二十圖　車僧（花器）

すことであります、花も餘りに數多く挿さないで、開花一輪を窓内に納め、窓の外へは蕾一輪、半開一輪位を挿して置けば誠に閑寂で高尚なものであります

さうして、この花器を用ふる期は、謠曲の車僧が舊十二月ですから、季もそれに因んで冬季に用ふる事であります。

第二十圖は車僧花器の圖であります。

附言

この書に解説のなきところは前編『池の坊生花のをしへ』に詳述してありますから、是非熟讀して知得せられたいのであります。

池の坊
圖解 **生花四季の活け方** 下卷 終

大正十五年十一月廿日印刷
大正十五年十二月一日發行

池の坊圖解生花四季の活け方

定價二圓

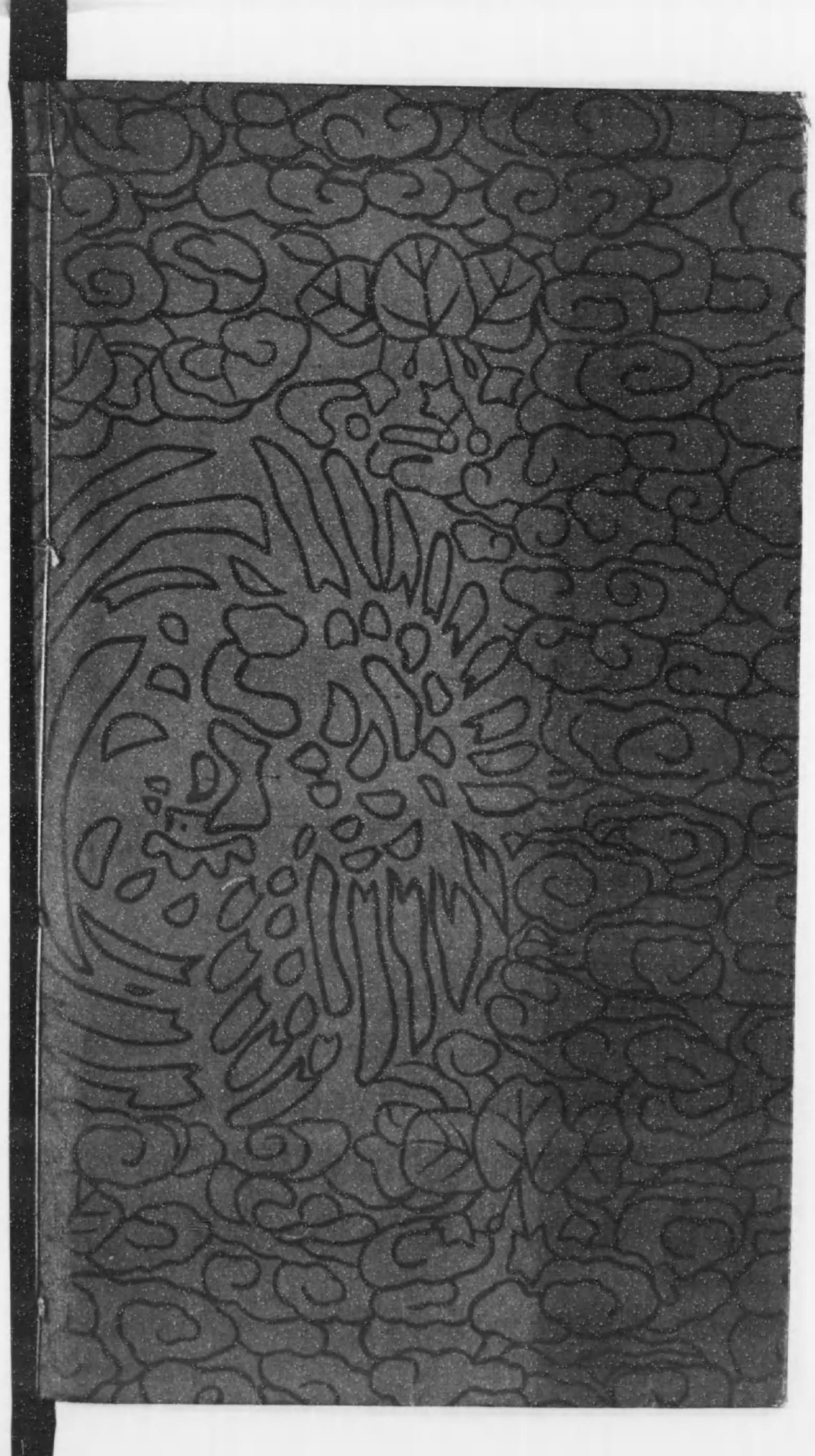
著者　南浦仙舟

發行者　大阪市南區鑄町四丁目四十六番地　前田梅吉

印刷者　大阪市西區阿波座上通三丁目六番地　上西印刷所

發行所　大阪市南區鑄町四丁目四十六番地　前田文進堂
電話船場一九九九番
振替口座大阪一二四七二番

310
344

鷲尾伯爵序文 殷野琢氏題字 橋本墨花著	圖解 盛花と水揚	定價壹圓廿錢 送料八錢	小林鷲州
同	挿花四季の薫	定價壹圓 送料八錢	遠藤元閑著
同	挿花四季の栞	定價壹圓 送料八錢	家元啓題字及 挿花 池の坊 熊谷八敞著 四季生花の手引
同	挿花錦の花	定價壹圓 送料八錢	浪華山人著
同	挿挿四季の綿	定價壹圓 送料八錢	久我侯爵題字 當道音樂研究會編
同	挿花千代の花	定價壹圓 送料八錢	近藤南州題字 竹軒樂人編輯
同	挿花千代の薫	定價壹圓 送料八錢	清原師賢公題字 春花軒左樂序文 泉石軒小山盤海著
未生流 御家元編	芭蘭百瓶	定價壹圓 送料八錢	見性宗般禪師題字 豊田尋洪禪師題字 玉置一成居士著
保田露人	投入盛花實現挿法	定價貳圓 送料八錢	千宗室 裏流
	茶の湯道しるべ 一名浦のとまへ	定價貳圓五拾錢 送料拾貳錢	
	茶道要艦	定價貳圓五拾錢 送料拾貳錢	
	盆石圖集 勝地百盆	定價貳圓 送料八錢	
	煎茶早學	定價六拾錢 送料四錢	
	新曲古曲 琴曲全集	並製定價九十錢 特製定價一圓四十錢 各送料六錢	
	茶道七事式	定價一圓五十錢 送料拾錢	
	四季生花の手引	定價貳圓貳拾錢 送料十二錢	
	茶湯奥儀抄	定價貳圓五十錢 送料十四錢	
	投入花と盛花	定價壹圓五拾錢 送料八錢	

終